

## 『もりおかの短歌』

### 夏の部 優秀賞十首

改札ではじける笑顔

えがお

風鈴が「おかえりなさい」と

ふうりん

輪唱している

宮城県仙台市 郷家

美磨

啄木の一握の砂手に持ちて

たくぼく

いちあく  
すなで  
も

夏の城跡

なつ  
しろあと

木陰で開き

盛岡市 八重樫

敏夫

いなかや にわ  
田舎家の庭の

こうぎょくいろつ

紅玉色付きて

あま  
ほうこうあわ  
おも

甘い芳香淡い思い出

で

盛岡市 小林

貴史

だれ  
誰よりも急いだ君は  
もりおか

だれ  
盛岡の  
しんかんせん

だれ  
新幹線を見たがつたろう

まち  
茨城県つくば市 渡邊

きみ  
陽基

わか  
この街との別れ惜しみつ  
お

わた  
渡る橋  
にどな  
二度泣き橋とふ開運橋を

わか  
青森県青森市 鈴木

操

まち  
秀麗な姿と真逆な岩手山  
まぎやく  
かいうんぱし  
いわてさん

せなか  
背中に仏

かご  
加護のあり

兵庫県神戸市 金井

靖子

ぼんひか  
盆控え

な  
つましの  
盆控え

な  
亡き夫偲ぶ母卒寿  
ははそつじゅ  
まる  
せなか  
亡き夫偲ぶ母卒寿

な  
丸い背中で草刈励む  
くさかりはげ  
まる  
せなか  
丸い背中で草刈励む

盛岡市 三澤

信裕

平成30年夏の部

鮎釣りの

かわらべ

講習なりや川原辺に

ひび

子どもの歓声楽しく響く

ひび

盛岡市

石川

修子

もりおか

まち

みみ

さち

く

盛岡の街は耳から幸が来る

おと

チャグチャグの音

か

わ

中津川のせせらぎ

盛岡市

中島

久光

もりおかに妻の出産里帰り

あかごま

つま

しゅつさんことがえ

赤子待ちわび

きぼう

なつぞら

希望の夏空

長野県上田市

瀧澤

佳士

平成30年夏の部

夏の部 〈ジュニア部門〉

優秀賞一首

該当なし

【講評】

一般部門

今夏の日本列島は記録的な暑さに見舞われた。盛岡も例外ではない。しかし暑い暑いと言えば尚更暑い。そうであるのなら秀麗な岩手山を眺め、中津川のせせらぎを聴きながら夏をやり過ごすのも悪くない。そうこうしているうちに、ほら夏の暑さも、そして人生さえも、気がつけば新幹線のように瞬く間に過ぎ去ってしまう…。もしさうならいつそのこと歌の中に、風鈴の音でしばしの涼が舞い降りる盛岡駅での再会や、盛岡城址の葉桜にかざした心の内を、一瞬の輝きを閉じ込めてしまおう。夏の詠み人の想いがそこにあるのだ。

平成三十年九月選 夏の部

投稿数 百二十四 首

選者 山本 玲子

## 『もりおかの短歌』夏の部

一般部門 優秀賞十首

こんなにも小さき人か

啄木のマネキン抱きて

Vサインする

埼玉県飯能市 小宅 初美

啄木の一字一字が

降りしきる五月雨のごと吾に

沁み入る

東京都港区 高清水 純

我七歳

一人遊びに口ずさむ

父の愛せし啄木の短歌

埼玉県飯能市 小宅 隆

いのち

命よりはるかに長く

ひとびと

こころ

い

人々の心に生きる

たくばく

うた

啄木の短歌

秋田県湯沢市

佐井

良子

ぶんこほん

文庫本

リュックにしのばせめざすのは

いわてひめかみたくばく

岩手姫神啄木のまち

静岡県藤枝市

井戸端

光代

いわてやますその あそ うま

岩手山裾野に遊ぶ馬たちの

は ぶたい

晴れの舞台か

うま

チャグチャグ馬コ

えき

京都府長岡京市

あお

吉田 正美

かぜかお

こうま

風薰る好摩の駅舎より仰ぎ見る

たくばく

こ

啄木焦がれし

ひめかみ

みね

姫神の峰

東京都港区

鈴木

有介

父  
母  
の  
青  
春  
の  
街

盛岡で麺三昧す

口福至極

こうふくしごく

宮城県仙台市 木村 智佑

父の絵の完成を待ち

北上の川見てをれば

飛行機のとぶ

東京都日野市 重信 祥太

岩大の北水の池

つゆどき

はな

梅雨時はスイレンの花

は

ひときわ映える

盛岡市 小林 貴史

令和元年夏の部

夏の部 〈ジュニア部門〉

優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

連日の猛暑に辟易した夏の日々でしたが、八月末締切りの「夏の部」の応募数はほぼ平年に並ぶ百二十首でした。中でも石川啄木にちなむ数首は、見るべきを視、捉えるべきを捉えて詠われているところに惹かれました。「こんなにも小さき人か啄木のマネキン抱きてVサインする」啄木記念館の等身大の像は意外なほど小柄です。きっと驚く人も多いことでしょう。

令和元年九月選 夏の部

投稿数

百二十

首

選者

松田 久惠

令和2年夏の部

## 『もりおかの短歌』夏の部

一般部門 優秀賞十首

新婚の父母暮らしたる与力小路

亡母よ

あなたは十九でしたね

宮城県仙台市

神田 和子

擬宝珠の橋からながめる

中津川

鮎釣る人にせせらぎの音

盛岡市

西川 政勝

盛岡の街に溢るる

持て成しの心伝える

優しき訛り

盛岡市

河野 康夫

群舞するさんさの夏が  
恋しくて想ひを馳せる  
なつ

もりおか まち  
盛岡の街

盛岡市 河野 康夫

さんしゅうき  
三周忌むかえる旧友を

くよう  
供養する

とも あ  
共に歩るいた盛岡の街

盛岡市 赤坂 昌信

ゆうがおせ  
夕顔瀬を

ある おも だ  
そぞろ歩けば想い出す

とも うた  
友と唄つた北上夜曲

盛岡市 小林 貴史

こずかた しろ  
不来方の城から

み いわてさん  
見ゆる岩手山

ざんせつせん てん  
残雪線が点になりゆく

盛岡市 鈴木 充

いつもなら

さんさの太鼓鳴り響く

もりおか なつことし しず  
盛岡の夏今年は静か

盛岡市 鈴木 充

啄木の短歌に魅かれて

ぶんがく うた ひ  
文学に目覚めし賢治

いわて きずな  
岩手の絆

秋田県湯沢市 佐井 良子

寺の下

まちや なら なたやちよう  
町屋が並ぶ鉈屋町

きよ わ みずいま か  
清き湧き水今も変わらず

千葉県佐倉市 坂下 明喜

令和2年夏の部

夏の部 〈ジュニア部門〉

優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

コロナ禍により、多くの催し物が中止となつたりして、社会全体が閉塞感に被われている。その中にあつても多くの方から歌が寄せられることを嬉しく思います。それぞれが、岩手や盛岡、そして啄木、賢治、また家族や友人にに対する思いの深い歌を詠まれており、心が癒されてゆく感じになりました。ただ少し残念なのは、推敲しないままに歌を出してしまった方がおられることがあります。推敲によつて歌の質が高まります。次回からはぜひ推敲をお願いします。

令和二年九月選 夏の部  
投稿数 八十五首  
選者 山本 豊

令和3年夏の部

## 『もりおかの短歌』夏の部

### 〈一般部門〉 優秀賞十首

愛猫のいない夏

つと銀ドロの深き木影に

マスクをはずす

盛岡市 郷家 美磨

病む夫に寄り添ふ吾も衰へて

古里岩手

手繰りて生くる

青森県青森市 鈴木 操

城跡に来れば  
脳裏を駆け巡る

盛岡城 の復元ビジョン

盛岡市 小林 貴史

うばゆり  
婆百合の咲く

ながまち  
長町と訪ね行く

たくぼくす  
啄木住みし新婚の家

東京都杉並区 高崎 美也子

あそ  
かはん  
きつさてん  
せきれいが遊ぶ河畔の喫茶店

やなぎ  
こかげ  
柳の木陰に

ふうりん  
おと  
風鈴の音

盛岡市 西川 政勝

カジカ突きハヤ追いかけし

なかつがわ  
中津川

こたち  
こえ  
いま  
なつ  
子達の声も今は懐かし

盛岡市 赤坂 昌信

令和3年夏の部

擬宝珠下

染物流し藍揺れて

職人巧古都守りたり

盛岡市

三澤

信裕

じやんじやんと煽る掛け声

わんこそば喉をするりと

胃袋満たす

盛岡市

河野

康夫

頂きは雲に隠れて岩手山

旅人吾も

マスク外せず

神奈川県秦野市

加藤

三朗

令和3年夏の部

涼風のわたる水面に映るのは  
すずかぜ  
みなも うつ

御所湖の空と  
ごしょこ そら

美しき岩手山  
うつく いわてさん

東京都板橋区

三宅

真紀子

## 『もりおかの短歌』夏の部

〈ジュニア部門〉 優秀賞三首

① 幸呼來と

想いを込めてひびかせた  
届けてほしい八月の風

盛岡市 荒井 心々愛

② 高松の

白いボートをゆらすのは  
光をそそぐ新緑の風

盛岡市 阿部 菜央

③

春の夜灯籠の中照らされて

震災のこと

こころにぎざむ

盛岡市 松坂 勇飛

【講評】

〈一般部門〉

県外からの参加者も多く、盛岡で何を発見するか、楽しく選歌した。素材は独自の感覚で見つめるのが良い。そして、整っていることが大切である。気持ちを言い切るのではなく、余情を残すことが、短歌には求められる。

〈ジュニア部門〉

ジュニア部門の作品は素直に気持ちを表現していると感じた。短歌の見所の一つは素材である。何を詠つているのかによって、歌の評価が決まる場合もある。新鮮な目で素材と向き合い、その気持ちを語つて欲しいと思う。

令和二年九月選 夏の部

投稿数 二百七 首

選者 赤澤 篤司

## 『もりおかの短歌』夏の部

### 〈一般部門〉 優秀賞十首

山々の青い匂いを胸に入れ  
やまやま あお にお むね い  
たくぼくいと

啄木愛しき  
あめ しぶたみ

雨の渋民  
わかれ しぶたみ

盛岡市 進藤美貴

城あと青きもみじに  
しろ あお  
かの歌よみと若き日の  
うた わか ひ

我かさねたり  
われ

奈良県橿原市 小西和美

さんさ踊り  
おど

熱夜の息は限りなし  
ねつや いき かぎ

娘と共に青春燃やす  
むすめ とも せいしゅんも

盛岡市 堀米公子

令和4年夏の部

さくらんぼ

ふく  
含みて眺む岩手山

わか  
若き想い出似たる味わい

盛岡市 赤坂昌信

えんどう  
沿道に華やぐ音色

ま  
待ち侘びたチャグチャグ馬コ

もりおか  
盛岡の初夏

盛岡市 河野康夫

うま  
馬コいく

わがことつ  
我娘嫁ぐ日の青空よ

わか  
若き二人の笑顔眩しい

盛岡市 川村佳子

まち  
この街は何か良い事有りそうな

かいうんばし  
開運橋とふ

はし  
橋を渡りぬ

盛岡市 佐藤忠行

令和4年夏の部

北上のケケチ、ケケチン鳴く河原

きたかみ

な  
かわら

麦わら帽子は

むぎ

ぼうし

鮎釣る人や

あゆつ

ひと

啄木の新婚の家君と吾の

たくぼく

しんこん  
いえきみ

あ

靴をぴたりと

くつ

寄せて揃へき

よ

そろ

奥州市 遠藤カオル

盛岡の

もりおか

降り注ぐ陽をなめていた

ふ

そそ  
ひ

塩飴を口に放りこむ午後

しおめ

くち  
ほう

ご  
ご

宮城県気仙沼市 及川舞

令和4年夏の部

## 『もりおかの短歌』夏の部

〈ジュニア部門〉 優秀賞二首

(応募時、中学生以下に限る)

たのしみはさんさおどりの  
笛の音ふえとたいこの音ねが

ひびく夕方ゆうがた

北上市 藤井彩花（十二歳）

海うみの幸さち 山やまの幸さち

来てみて感じたき 人の幸かん

また来るよく もりおかにひと 人の幸さち

栃木県那須塩原市 佐々木花（十二歳）

【講評】

一般部門・ジュニア部門

盛岡はどうやら過去と交信ができるタイムマシーンかもしれない。自らの過去と対話をしたり、啄木が生きた時代や季節を感じたり：なぜ盛岡は過去と現在の接点を持つのか？その理由を考えてみたい。さんさ踊りやチャグチャグ馬コの夏の風物詩がそうさせるのか。人々の脳裏に焼き付ける風景とは。ひとつ言えることは、盛岡の夏は短い。情熱的に一気に燃えてそして秋を迎える。それはまるで一瞬のきらめきを残して消える花火のよう。一瞬と永遠は表裏一体、その一瞬を、過去と現在を歌に託したくなる気持ちが私にはわかる。

令和四年九月選 夏の部

投稿数 九十二 首

選者 山本 玲子